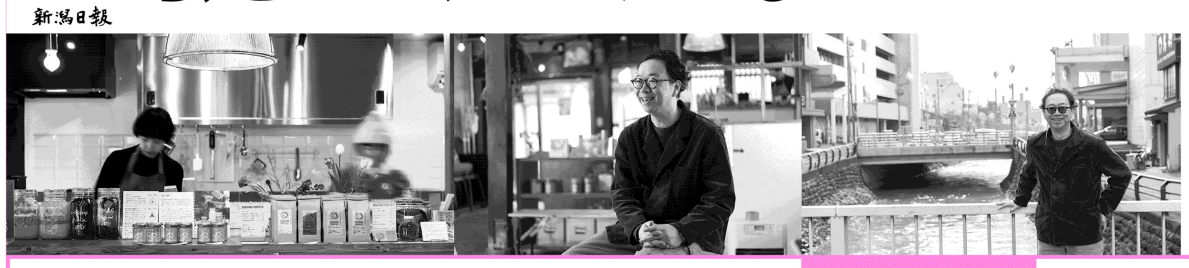
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

未来のチカラ in 上越
つなげる つたえる つかえる
新潟日報

挑め、上越。



Joetsu Challenger's INTERVIEW
上越チャレンジャーズインタビュー

#009 コーヒーショップから、上越をおもしろく。

DIGMOG COFFEE（ディグモグ コーヒー）

大塚（おおつか） いちお (51)

大塚いちおさんは、東京でイラストレーターとアートディレクターとして活躍中で、国内外の受賞も多数ある。NHK Eテレの人気番組「みいつけた！」や2012年から2017年の「えいごであそぼ」のキャラクターのデザインを手がけ、Jリーグ川崎フロンターレのアートディレクターも務めている。そんな大塚さんが、少年時代に自転車で走り回っていた場所にコーヒーショップを開店。高田のまちに顔を出したモグラ店長「ウェルモ」は、どんな深掘りをするのか、とても楽しみだ。

僕は高田地区の生まれで、小学校も雁木通りに近いところでした。当時は、高田駅周辺がまちの中心だったので、学校帰りや休みの日には、この辺に来てよく遊んでいましたね。小さいころから大好きだったマンガを探しに来たり、中高生のころはボーリング場や映画館にも通っていました。何も用事がなくても自転車で来てみると友だちがいたりして。

だからと言って、子どものころは「高田のまちが素敵だ」なんて全然思わなかった(笑)。ただ、僕の家は町家ではなかったので、町家の友だちの家に行くとちょっと変わっていておもしろいなあと興味を持っていたくらい。

友だちとは野球をしたり、冬には金谷山でスキーをしたり、あとは絵が好きだったから集まってマンガを描いたりしてました。それもあって、中学、高校では美術部に入っていました。高田のまちが普通に好きで、ものすごい都会志向ではなかったけれど、高校生になって、将来デザインやイラストの仕事をしたいと思ったときに、新潟市も考えましたが、どうせ家を出るなら東京に行きたいと思いました。

東京での一人暮らしは多少の不安もありましたが、枠から解放されたようで、新鮮な気持ちになったのを覚えています。上京して1年目は、たびたび上越の実家に帰っていましたが、2年目以降は東京での生活が忙しくなり、盆と正月に帰るだけになりました。いまはない「大矢」さんというトンカツのおいしいお店があって、子どものときから大好きだったので、帰省のたびに食べに行くのが楽しみでした。

2年制のデザイン学校からグラフィックデザインの制作会社に内定をもらいましたが、入社前に手伝いをしているうちに、本当にやりたいことは、これなのだろうか？という疑問が湧いてきて、結局その会社に入るのはやめることにしました。

両親にはものすごく心配をかけました。東京に就職が決まり、息子は上越に戻らないとがっかりしていたところに、今度は就職しないと言い出したのですから。

「自分で絵を描いてイラストレーターになりたい。そのためには、フリーランスになるしかないので、バイトをしながら数年チャレンジしたい」と、必死に説得しました。

学校を卒業したのが20歳で、その後はバイトをしながら描いたイラストを自分で売り込み、公募に出したりする生活でした。いま思うと、とても幸運なことに25歳のときに1年間のレギュラーの仕事をもらうことができたんです。1年後のことは全く分かりませんでしたが、仕事がなくなったらそのときに考えようと思い、バイトは辞めました。イラストに専念できるうれしさと、家賃が払えて、生活できる金額がもらえて満足という状況でした。

30歳を過ぎてからは広告やメジャーな仕事も増えたので、仕事場を借りることになります。自分発信でディレクションする仕事も多くなり、30代後半にはスタッフも入れることができました。

一つの仕事をすると、それを見た人から次の仕事の依頼があり、それが良いものに仕上がると、さらに良いものをつくるというように、階段を1段ずつ昇るように成長できたのは幸運でしたね。大切にしていたのは、広告の常識にとらわれずに、必要だと思うことや依頼者の期待以上のことをしようと心がけることです。その一つとして、子ども向けのワークショップをしていました。

僕が子ども向けのワークショップをしたり、テレビ番組の中で絵を描いたりなど、いわゆるイラストレーターらしくない仕事をしていたことが、NHK Eテレ「みいつけた！」を担当するきっかけになったのかもしれません。そして番組制作前の1年間は、大学の先生方とブレインストーミングを重ねました。その中で、子どもも4～5歳からは大人と同じような理解も始まるという話が出たので、子ども向けにつくるというより、大人が観ても楽しめるものにしようと考えました。一緒にテレビを観ているお母さんやお父さんがクスッと笑うと、子どもも楽しくなって親との会話が生まれます。テレビの前の親子に、そういう環境をつくりたかった。だから、トークイベントなどで若いお母さんやお父さんから「夢中になって観ています」と言っていただけると、すごくうれしいです。

僕にとっての30代は、東京での仕事が軌道にのり、プライベートでは子どもが生まれ、両親がいる上越へ帰省する機会が増えた時期でした。子どもを遊ばせようと上越に来てみると、自分の遊んでいた場所がなくなっていたり、友だちの家だった町家が空き家になっていたり、壊されていたり、そのたびに寂しさは感じましたね。でも、時代とともにまちが変化していることに気づきつつも、それに対して自分が何かしようとはまだ思いませんでした。

40代になって、両親が亡くなってからも、空き家になった実家の管理などで上越にはたびたび来ています。そして5年前に、北陸新幹線の開業イベントに関わるデザインを上越市から依頼されまして、上越でも仕事をするようになりました。そのときJリーグ川崎フロンターレのユニフォームをデザインしていたことがきっかけでした。

上越の方にとっては、僕の名前よりも「みいつけた！」の「コッシー」や「サボさん」の方が知られているので、単なるデザインではなく、キャラクターが喜ばれると思いました。そこで、北陸新幹線はトンネルが多いことからモグラのイメージを持ち、新幹線らしく足が速いのが自慢のモグラのキャラクター「ウェルモ」をつくりました。「ウェルモ」は、おでこが妙高山の形をしていまして、「富士びたい」ではなく「妙高びたい」なんです(笑)。

新幹線の開業日には、地元サポーターのおばちゃんたちと一緒に駅でお出迎えをしました。ワークショップを開いて、みんなで色塗りをした横断幕を持ってお出迎えしたところ、一番電車は終点の金沢まで行く人が多く、上越妙高駅ではほとんど人が降りず、みんなでがっかりしたのも良い思い出です(笑)。

キャラクターの「ウェルモ」は、営利目的以外なら市のホームページから自由に使ってもらえるので、ぜひ地元の方に活用していただきたいです。僕の方でも、活躍の場を増やそうと、地元誌で「ウェルモ」のマンガの連載や、モグラ目線で上越の人や地域を取材する活動を行っています。

こちらに来ると新鮮な気持ちになりますね。地元の人が声をかけてくれたり、東京にはない人の温かさにほっとしたり。東京と上越の2拠点を行き来することが、自分にとって良い効果になっています。新幹線で2時間移動するだけで、景色も季節感も全くちがいますからね。とても刺激を受けて活性化します。逆に、上越の人が演劇や美術展などを観るために、東京を行き来するのもいいと思います。かごの中に閉じ込められて何もできない時代ではないのだから、お小遣いをためて、ここにないものを観に行き、1泊でも2泊でも泊まってみたらいい。帰って来たら、上越のことが新鮮に見えて、改めて地元の良さを感じられるんじゃないかな。

僕は地方出張に出かけたときに、「そこに住みたいか？」という視点でまちを見ます。その基準は、気軽にランチが食べられる店、おいしいコーヒー店、お酒が飲める店、書店、雑貨屋、古着屋、セレクトショップ、映画館があること。いまは東京に住んでいて、オフィスは渋谷にあるけど、毎日、新宿とかに行くわけじゃない。半径数百メートルの中で、ランチをしたり、お店に行ったり、コーヒーを飲んだりして暮らしているのです。

1軒やってみたい」と思ったときに、高田で町家を再生している人たちがいて、物件を紹介していることを知ったのです。

ちょうど良い物件が見つかり、昨年の12月にコーヒーショップをオープンしました。開店後は、近所のおじいちゃんやおばあちゃんがコーヒーを買いに来てくれています。お店の名前は「ディグモグコーヒー」で、「ディグ」とは掘るという意味です。いまはインターネットで調べれば、ひと通りのことは何でも知ることができます。でも実際に見て、触れて、匂いをかいだり、聴いたりして、物事を掘り下げることが少なくなっています。イラストもデジタル化が進んでいるけれど、僕はあくまで手描きにこだわっている。手で描くという人間の根源的な営みを死ぬまで続けていきたいと思っている。それが僕のディグ。だから、ここではいろいろな人の趣味でも何でもいいのですが、掘り下げたものをみんなで共有できたら、おもしろいと思っています。

コーヒーをきっかけにお店に来たら、僕の絵があったり、友人たちの雑貨があったりして、若い子たちの感性が刺激されたらうれしい。だから、定期的にイベントもやっていきたい。東京の友人たちは築150年の空間と聞いただけで、「やってみたい」と言うけれど、少し待ってもらっています。来てみたら、お客さんが数人というのでは申し訳ないから(笑)。

だからと言って、上越の人だけに合わせたイベントをやるということでもないのです。それは他の場所で既にやっていることだから。いまは、こちらが発信したことを受けとめてくれる人を少しずつ増やしている段階です。

これまで東京や他の地域から上越に来た友人たちは、「また来たい」と言ってくれて、実際に何度も足を運んでくれています。それはこのまちを気に入ってくれたからです。だから、ディグ＝深掘りしたい人たちが一定の人数になったら、日本全国や国外からも、上越の「ディグモグ」を目指してやって来てくれると思います。それが、高田や上越の盛り上がりにつながってくれたらうれしい。

上越をたくさんの人に知ってもらいたいし、若い子たちに「ディグ」することのおもしろさを感じてほしいです。いますぐに分からなくても、いつか上越から巣立って、いろいろな場所に行って、ずっと後になって出会い直したり、気づいたりしてもらえるといいと思っています。そんなことを願いつつ、上越の方に温かく見守られていることを感じながら、僕は月に数回、上越へ来ています。「ディグ」することに興味を持った方は「ディグモグ」のアドレス(digmogcoffee@gmail.com)に空メールを送ってください。イベントなどの情報をお届けしますよ。

だから、そんな店がいくつかできたら、もっと高田に滞在したくなると思いました。京都や東京の下町には古い建物をリノベーションして、味のあるお店があります。全部は無理だけれど、「何か

感性が刺激される出会いをつくり、上越への注目をじわじわ広げたい。

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。